

轟貝塚Ⅱ

— 平成23～28年度（第9～13次）発掘調査概要報告書 —

2017

熊本県宇土市教育委員会

序 文

宇土市を含む有明海沿岸には、その豊かな生物資源を背景に、貝塚をはじめとした縄文時代の遺跡が多数残されています。なかでも轟貝塚は古くから世に知られ、今日著名な数々の研究者により調査が行われてきた歴史を持ち、九州の縄文時代前期を代表する轟式土器の標式遺跡であることと併せ、考古学史上非常に重要な遺跡です。

轟貝塚は昭和33年に宇土市の史跡に指定され、教育委員会ではこれまでに範囲確認調査や過去に大学等が行った調査資料の再整理などを実施してきました。本書は、それに続く貝塚周辺発掘調査及び貝塚中心部の発掘調査の概要報告です。特に貝塚中心部の調査は、過去に慶應義塾大学を中心に調査が行われてから約50年、京都大学が最初に発掘調査をした時からは約100年ぶりの調査であり、過去の調査成果に立脚しながらも、当時は明らかにし得なかった新たな事実が確認されています。

これらの調査を進めるにあたって御指導・御協力いただきました文化庁記念物課ならびに熊本県教育庁文化課、宇土市重要遺跡保存活用検討委員会の先生方をはじめ、関係各位に心より感謝申し上げます。

平成29年3月

宇土市教育長 太田 耕幸

例 言

- 1 本書は、熊本県宇土市宮庄町に所在する宇土市指定史跡・轟貝塚において平成23～28年度に行った発掘調査の概要報告書である。発掘調査は、宇土市内遺跡発掘調査等事業（国庫補助事業）に伴い宇土市教育委員会が実施した。
- 2 調査は平成23～25年度には遺跡の範囲確認調査として、平成26～28年度は過去に行われた調査の再発掘調査を基本として、貝塚中心部に対し実施した。調査地は宇土市宮庄町字居屋敷、須崎、及び石橋町に所在する。
- 3 発掘調査は芥川博士（宇土市教育委員会文化課技師）が担当した。
- 4 本書に掲載した調査位置図の作成は山口陽子、廣瀬恵子、中川ゆかり、内田美和、秦翔平、松浦正朋、竹村南洋、及び芥川が行った。
- 5 発掘調査時及び遺物の写真は芥川が撮影した。
- 6 本書の挿図で用いた平面直角座標及び方位は世界測地系を使用している。
- 7 本書の執筆・編集は芥川が行った。
- 8 出土遺物その他の関連記録は、宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に収蔵・保管している。

本文目次

第1章 序章	第3章 貝塚中心部の発掘調査
第1節 調査に至る経緯…………… 1	第1節 調査の目的と方法…………… 7
第2節 調査の組織…………… 1	第2節 調査の成果…………… 7
第3節 位置と環境…………… 2	第4章 総括…………… 10
第4節 轟貝塚における過去の調査について…………… 4	
第2章 貝塚周辺部の発掘調査	
第1節 調査の目的と方法…………… 6	
第2節 調査の成果…………… 6	

挿図目次

図1 轟貝塚周辺遺跡地図…………… 3	図3 貝塚中心部調査位置図…………… 5
図2 貝塚想定範囲と 周辺発掘調査位置図…………… 5	図4 轟貝塚基本層序及び 土地利用の変遷……………12

表目次

表1 轟貝塚調査史…………… 4

写真目次

写真1 標準土層断面（4 T南東壁）…………… 9
写真2 集石検出状況（8 T）…………… 9
写真3 集石に伴う遺物…………… 9
写真4 5号人骨検出状況（8 T）……………10



轟貝塚の位置 (左：1/20,000,000 右：1/2,000,000)

第1章 序 章

第1節 調査に至る経緯

宇土市宮庄町に所在する轟貝塚は、縄文時代早期末～前期の轟式土器の標式遺跡であり、古くから研究者の間で注目されてきた。第4節で述べるように、古くは大正の頃から、複数の大学や研究者により調査が行われ、縄文時代から中世にかけての土器・人骨・貝製品・石器・骨角器・陶磁器など多種多様な遺物が出土している。それらの調査で出土した遺物の多くは、それぞれ調査主体となった大学等が持ち帰り保管してきた。その内、昭和41年に慶應義塾大学の江坂輝彌氏を団長に行われた調査の出土遺物は、長らく東京の慶應義塾大学構内で保管されていたが、平成13（2001）年度の宇土市への仮移管と平成19（2007）年度の再整理報告書の刊行を経て、平成23年度（一部は26年度）に正式に宇土市に移管され、遺跡所在地である宇土市での活用が可能となった。

一方、轟貝塚自体は昭和33（1958）年に市史跡に指定され、守るべき遺跡として公的に位置づけられた。しかし、何度も調査が行われてきた反面、遺跡の範囲や時期別の変遷、貝塚に伴うとみられる集落の位置や内容など、遺跡を語る上での基礎的な情報が未解明の課題として残っている。そうした中で近年、遺跡周辺でも新興住宅が拡大するなど、開発により遺跡が破壊される危険が高まっている。

こうした状況を受けて、宇土市では貝塚の範囲や内容把握を早急に行う必要があると判断し、平成15（2003）年度に貝塚中心部の測量調査を、16～17（2004～2005）年度に範囲確認を目的としたトレンチ調査を実施した。本書は、これらの調査に続く遺跡の内容確認を目的とした調査の概要報告である。

第2節 調査の組織

調査主体 宇土市教育委員会

調査責任者 宇土市教育長 木下博信（平成23～25年度）、浦川司（26～27年度）、太田耕幸（27～28年度）

事務局 教育部長 山本桂樹（23～25年度）、前田保幸（26～28年度）
文化課長 坂本純至（23～24年度）、木下洋介（25～27年度）、池田和臣（28年度）、山本保廣（28年度）

文化(財)係 松田安代（係長：23年度）、船田元司（課長補佐兼係長：24年度）、赤澤憲治（係長：25～27年度）、宮邊幸子（参事：23・25～28年度）、稲崎憲一（参事：24年度）、園田志穂里（参事：24年度）、藤本貴仁（参事：23～27、係長：28年度）、九谷景子（25～27年度）、平田睦美（主事：23～24年度）、大浪和弥（技師：28年度）、芥川博士（技師：23～28年度）

※平成23年度の文化財係は、機構改革のため平成24年4月より文化係

調査指導

文化庁文化財部記念物課、熊本県教育庁教育総務局文化課

宇土市重要遺跡保存活用検討委員会 吉村豊雄（熊本大学名誉教授 日本史）
渡邊一徳（熊本大学名誉教授 地質学）
甲元眞之（熊本大学名誉教授 考古学）
山崎純男（元福岡市文化財部長 考古学）
小畑弘己（熊本大学教授 考古学）
山尾敏孝（熊本大学大学院教授 土木史）

協力機関及び調査指導・協力者

株式会社古環境研究所、肥後考古学会、九州縄文時代研究会、瀬戸田佳男・水ノ江和同・近江俊秀

(文化庁記念物課), 村崎孝弘・長谷部善一・池田朋生・木庭真由子(熊本県教育庁文化課), 黒住耐二(千葉県立中央博物館), 樋泉岳二(早稲田大学), 中村俊夫(名古屋大学), 濱口俊夫・吉田恒・根本なつめ・佐藤伸二・辻誠也・前川清一・高木恭二(宇土市文化財保護審議会), 島津義昭(元熊本県教育委員会), 杉村彰一(肥後考古学会会員), 富田克敏(九州文化財研究所), 西田巖(佐賀市教育委員会)

発掘調査作業員

飯田孝一, 内田博美, 小畑律子, 末鶴順次, 中川道治, 中村洋, 中村正立, 西村和子, 橋本カズエ, 橋本チエ子, 東原遥希, 平野泰彦, 福田フミエ, 藤浦義麿, 古山節子, 右田純輔, 村山艶子, 森実, 余語政利, 秦翔平・松浦正朋・竹村南洋(熊本大学学生), 竹林香菜(明治大学学生)

整理・報告書作成作業員

内田美和, 中川ゆかり, 廣瀬恵子, 山口陽子

第3節 位置と環境

熊本県西側中央から西方の有明海に向かって突出する宇土半島。その半島を構成する大岳火山系の山塊から東に派生する尾根の先端付近, 標高6m程度の舌状台地上に轟貝塚(1)は所在する。貝塚の西には標高218mの白山を間近に望み, 対する東側には幅50m程の狭い低地を挟み, 地元で西岡台と呼ばれる標高約40mの独立丘陵が存在する。また北東方向には旧白川や緑川, その支流である浜戸川の堆積によってできた熊本平野が広がっており, 貝塚がこの沖積平野の南西端部に位置することがわかる。貝塚の南側には, 上記の丘陵や尾根に囲まれ限られた範囲に標高4m程度の低地が存在し, 貝塚と西岡台丘陵との間の低地を介してわずかに熊本平野とつながっている。縄文時代の海進期には, この低地を介して貝塚南側まで海が入り込んだ可能性が高い。

現在, 貝塚の南西方向約200mには, 環境省の日本名水百選に選定された湧水「轟水源」が存在する。この湧水がいつから存在していたか定かではないが, 縄文時代に人がここに生活を営み, 貝塚が形成されたひとつの要因として, 付近に湧水が存在した可能性は高いと考えられる。

以上から縄文時代における轟貝塚の周辺環境を考えると, 波穏やかで豊富な魚介類が生息する有明海とその入り江に面し, 背後には宇土半島の山々と森林, 湧水が存在する等, 山海の豊富な資源に恵まれ, 人の生活に適した環境だったことがうかがえる。

そうした環境を背景に, 轟貝塚周辺には縄文時代から歴史時代まで数多くの遺跡が残されている。縄文時代の遺跡としては, 轟貝塚の東方約50mの至近距離にあり, 前期から後期にかけての遺物とドンダリなど堅果類の貯蔵穴が発見された西岡台貝塚(2), 曾畑式土器が出土した馬場遺跡(3), その他, 縄文時代の遺物を含む包蔵地である石ノ瀬遺跡(4)や北園遺跡(5)が挙げられる。また, 直線距離で4km程度離れているが, 縄文時代前期の曾畑式土器の標式遺跡として知られる曾畑貝塚も, 轟貝塚と並んでこの地域の縄文時代前期を代表する遺跡として重要である。

続く弥生時代の遺跡として, 中期の黒髪式の甕棺が出土した北平遺跡(6), 弥生時代後期の集落跡とみられる下松山遺跡(7), そして前期～後期の拠点集落とみられる城山遺跡(8)などがある。特に城山遺跡は, 続く古墳時代, 付近に豪族居館と考えられる西岡台遺跡(9)が出現することとの関係が注目される。西岡台遺跡からは, 舶載三角縁神獣鏡が出土した城ノ越古墳(10)や迫の上古墳(11), スリバチ山古墳(12)など同じく前期の築造とみられる前方後円墳を一望でき, 豪族居館とその葬られた古墳とが一体的に把握できる例として全国的にも希少である。これら前期の首長墓系譜は中期以降には断絶し, やや離れた場所に単独で立地する天神山古墳(13)を除いては, 付近に前方後円墳は築造されなくなる。前方後円墳以外では, 前期の円墳とみられる神合古墳(14)や猫ノ城古墳(15)の他, 横穴式石室を主体部に持ち後期から終末期にかけての築造とみられる東畑古墳(16)や仮又古墳(17), 山王平古墳(18), 金嶽山古墳(19)などの円墳, 県内唯一の終末期方墳である椿原古墳(20), 多量の須恵器が出土した神ノ木山古墳群(21)などが存在する。その他, 恵里遺跡(22)や椿原遺跡(23)な

ど、古墳時代の包蔵地も存在する。

古墳時代に比べ古代の遺跡は少ないが、西岡台遺跡や城山遺跡で土師器・須恵器が出土し、西岡台遺跡ではその他に故意に破碎された土馬も出土している。

中世になると西岡台丘陵を利用して宇土氏・名和氏が居城とした宇土城跡（西岡台）（9）が築城された。これまでの発掘調査により、中心となる曲輪とその周囲で多数の掘立柱建物跡や竪堀・横堀跡、門跡などが検出され、特に横堀の一部が未完成である点や廃城の際の儀礼的行為「城破り」とみられる痕跡が見つかった点などが注目される。また、宇土城跡と関連する中世の遺跡として、中世の居館跡とみられる椿原遺跡、宇土城主・名和氏の菩提寺である曹洞宗崇福寺跡（24）などがある。その付近、現在の椿原町字船津周辺には、中世の港湾施設である「宇土津」（25）が存在したとみられている。その他、陳の前遺跡（26）や伊津野遺跡（27）でも中世の土器・陶磁器が出土している。

中世末期には、キリシタン大名として知られる小西行長により宇土城跡（城山）（28）が築城され、付近には家臣屋敷跡とみられる城山塩田遺跡（29）も残るが、関ヶ原の戦いで小西が敗れ処刑された後、肥後一円を支配した加藤清正によって城は改修された。それも近世初期には廃城となり、続いて宇土細川藩3万石の陣屋町が整備された。小西・加藤時代の城下町を踏襲しつつ、今も使われ続ける上水道「轟泉水道」（30）の敷設などを経て整備されたこの町並みが、現在の宇土市中心街の姿につながる。

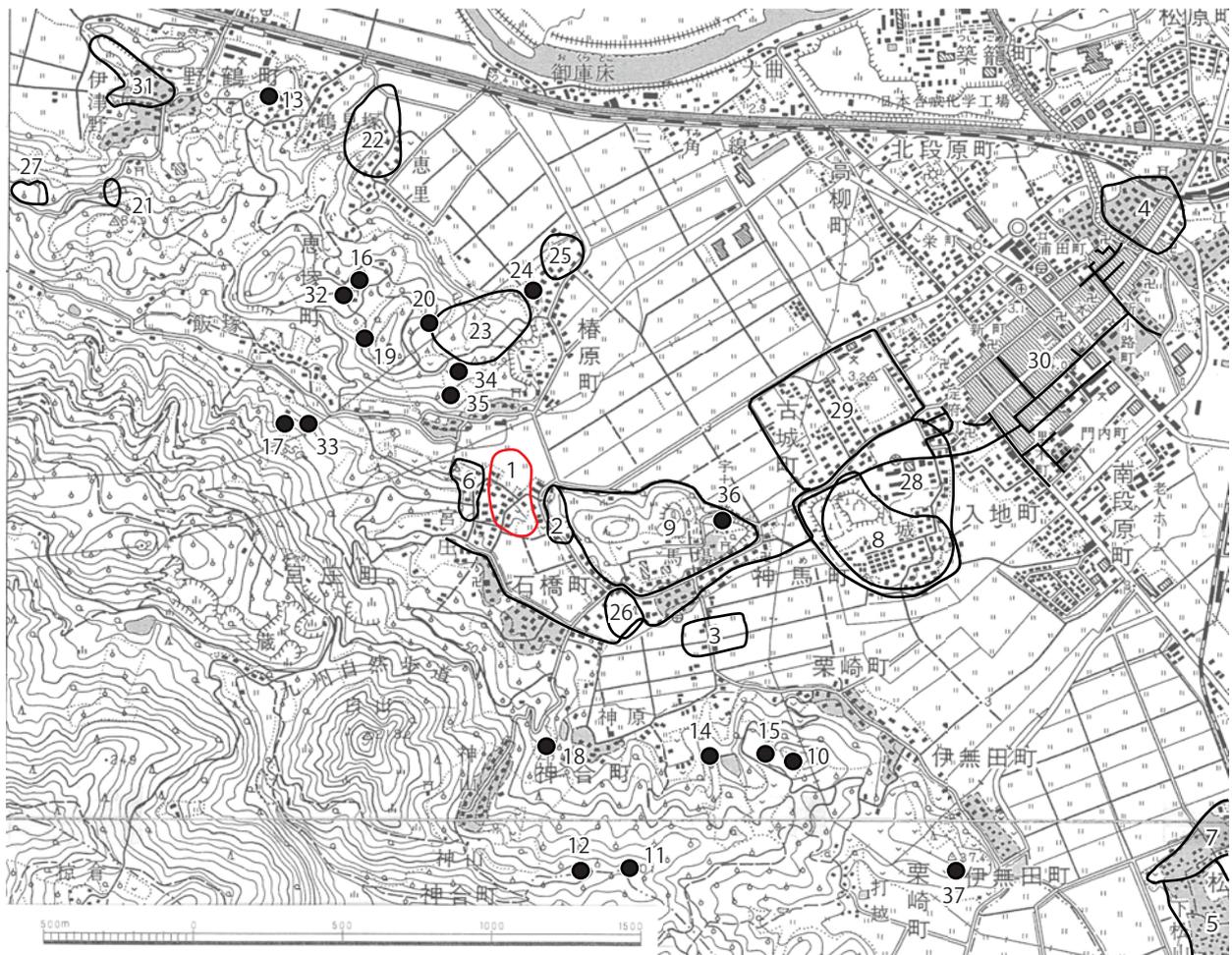


図1 轟貝塚周辺遺跡地図 (1/25,000)

- 1 轟貝塚 2 西岡台貝塚 3 馬場遺跡 4 石ノ瀬遺跡 5 北園遺跡 6 北平遺跡 7 下松山遺跡 8 城山遺跡 9 西岡台遺跡 10 城ノ越古墳 11 迫の上古墳 12 スリバチ山古墳 13 天神山古墳 14 神合古墳 15 猫ノ城古墳 16 東畑古墳 17 仮又古墳 18 山王平古墳 19 金嶽山古墳 20 椿原古墳 21 神ノ木山古墳群 22 恵里遺跡 23 椿原遺跡 24 崇福寺跡 25 宇土津（推定地） 26 陳の前遺跡 27 伊津野遺跡 28 宇土城跡（城山） 29 城山塩田遺跡 30 轟泉水道 31 野鶴貝塚 32 東畑2号墳 33 仮又2号墳 34 椿原貝塚 35 椿原石蓋土壙墓 36 西岡台箱式石棺 37 久保1・2号墳

第4節 轟貝塚における過去の調査について

轟貝塚ではこれまで、多くの大学・研究者により発掘調査が行われてきた（表1）。遺跡の発見は明治31（1898）年に佐藤伝蔵氏により紹介されたものが初見とみられ、その後大正6～9（1917～1920）年に鈴木文太郎氏、濱田耕作氏、清野謙次氏ら京都帝国大学による調査（第1次・第2次調査 濱田・榊原1920、清野1920）、東北帝国大学の長谷部言人氏による調査（第3次調査）が相次いで行われる。この頃の調査は人骨の検出を主な目的としていたとみられ、報告も人骨の出土状況を中心に書かれている。長谷部氏による調査から10年後の昭和5（1930）年、鳥居龍蔵・松本雅明両氏らによる調査（第4次調査）が実施された。調査の詳細は不明だが、この鳥居龍蔵氏の来訪は同年の肥後考古学会の発足につながるなど、熊本の考古学史にとって重要な意味を持つ（松本1967）。轟貝塚が担う学史の一端として、忘れてはならない点であろう。

層ごとの出土遺物など、現在の発掘調査にも通じる考古学的な記録が残る最初の調査として、昭和33（1958）年に小林久雄氏・松本雅明氏・富樫卯三郎氏をはじめ熊本大学・宇土市・宇土高校などが協力して行った調査がある（第5次調査）。後に松本氏らによって轟A～D式の分類案が提示される基となった調査である（松本・富樫1961）。続く昭和41（1966）年には慶應義塾大学の江坂輝彌氏を団長とする熊日学術調査団による調査が実施された（第6次調査 江坂1971・宇土市教委2008）。調査成果として、多くの出土遺物と共に縄文時代中期～後期にかけて新旧2つの貝塚が存在する状況が確かめられたことが注目される。これら昭和の2調査による成果が、現在まで轟貝塚における堆積状況の理解の根幹を成している。

轟貝塚を直接の対象とした過去の発掘調査は以上だが、その他に宇土市教育委員会が実施した貝塚周辺部における調査がある。ひとつは、轟貝塚の東方約50m、国史跡宇土城跡が存在する西岡台丘陵の麓に存在する西岡台貝塚の発掘調査である。昭和60（1985）年に農業用排水路の工事に伴って調査が行われ、縄文時代前期～中期とみられるドングリの貯蔵穴を検出した（宇土市教委1985）。もうひとつは、平成16～17（2004～2005）年度に実施した範囲確認調査（第7・8次調査）である。貝塚周辺部で計4か所のトレンチ調査を実施した結果、貝層の堆積範囲を北西―南東約120m、北東―南西約60mの範囲と推定し、その周囲に攪乱を受けた二次的な貝層が広がるとした（宇土市教委2005・2006）。

表1 轟貝塚調査史

	調査年次	調査主体者	調査内容・成果
	明治31 1898	佐藤伝蔵	明治31年8月『地学雑誌』に轟貝塚のことを掲載。学史上、轟貝塚について最初に言及したものとみられる。
第1次調査	大正6 1917	京都大学（鈴木文太郎ほか） 熊本医学専門学校	発掘調査。男女各1体の人骨を発見。
第2次調査	大正8 1919	京都大学 （濱田耕作・清野謙次ほか）	貝の散布状況から貝塚の範囲推定を行い、東側に存在する西岡台貝塚についても記録にとどめる。発掘調査では土器・石器・貝製品など多くの遺物や18体及び人骨が出土。
第3次調査	大正9 1920	東北大学（長谷部言人）	正式な調査報告書なし。濱田氏が記した概要によれば、人骨20体あまりと弥生土器・骨角器・石製耳飾などが出土。
第4次調査	昭和5 1930	鳥居龍蔵・松本雅明	詳細不明
第5次調査	昭和33 1958	宇土市・宇土高校・熊本大学 （小林久雄・松本雅明・富樫卯三郎ほか）	部分的だが、貝層を含むプライマリーな堆積状況を確認。出土した轟式土器の型式学的な検討の結果、A～D式の分類及び確実な層位関係による編年が行われた。
第6次調査	昭和41 1966	慶応大学（江坂輝彌）	新旧2つの貝層が存在すること、古い方の貝層は中期の阿高式期に比定できることが確かめられた。出土遺物は慶応大学が所蔵していたが、平成13（2001）年に図面や日誌と共に宇土市に移管され、平成19（2007）年度、宇土市教育委員会より再整理報告書が刊行された。
第7次調査	平成16 2004	宇土市教育委員会	貝塚の範囲確認を目的とした調査。計4か所のトレンチによる調査で、貝塚の一次堆積層は南北約80～100m、東西約70～80mに限定でき、その周囲に二次堆積層が広がることが推定された。
第8次調査	平成17 2005	宇土市教育委員会	
第9次調査	平成23 2011	宇土市教育委員会	貝塚周辺における集落跡（居住域）の所在確認のための調査。貝塚の北側から北西側・西側にかけて計7か所のトレンチ調査を行ったが、一部のトレンチから若干の遺物が出土した以外は、縄文時代の集落を示唆するような痕跡は発見されなかった。
第10次調査	平成24 2012		
第11次調査	平成25 2013		
第12次調査	平成26 2014	宇土市教育委員会	未だ不明瞭な点が多い貝塚中心部の堆積状況等を確認するため、過去の調査区への再掘削と基本とする発掘調査を実施。その結果、2次調査区の下部で、早～前期の遺物包含層と集石遺構、焼土を伴う土坑など、縄文時代早期～前期の生活痕跡を初めて確認した。また、それに前後する層位から人骨も検出した。
第13次調査	平成27 2015 平成28 2016	宇土市教育委員会	

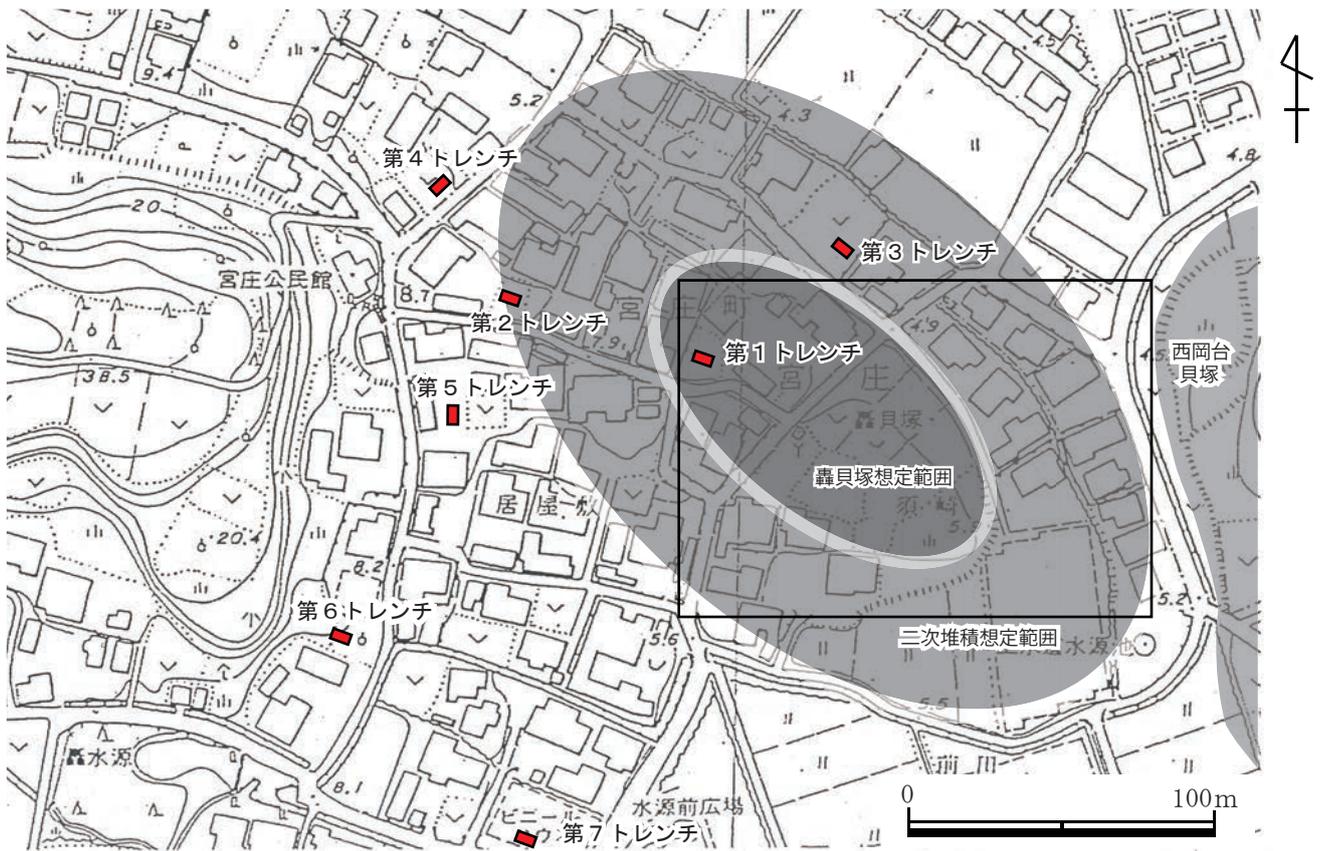


図2 貝塚想定範囲と周辺発掘調査位置図 (1/2,500)



図3 貝塚中心部調査位置図 (1/1,000)

第2章 貝塚周辺部の発掘調査

第1節 調査の目的と方法

平成16～17年度に宇土市教育委員会で実施した範囲確認調査により、二次堆積を含めた貝層の広がりを見推定した(図2)。しかし、貝塚といえども貝層部分だけが遺跡ではなく、その付近には貝塚に貝を廃棄した人々の生活があったと考えるのが自然である。よって、そうした生活痕跡の有無や、居住域や墓域の位置など、集落全体の構造が検討されて初めて遺跡の全体像が把握されたとと言える。

以上の考えに基づき、貝層以外を含めた縄文時代の集落構造を解明するために行ったのが、平成23～25年度の貝塚周辺における発掘調査である。

調査は貝塚中心部から北～北西側の、貝塚よりやや標高が高い微高地部分を主な対象とした。これは、舌状台地の先端に食物残渣の廃棄場所としての貝塚が存在するならば、居住域はその少し手前の台地上にある可能性が高いとみたことによる。ただし、現在そこは民家が密集する宅地となっており、まとまった調査区が設定できない。そのため、やむを得ず個人の敷地内で小規模なトレンチによる発掘調査を行うこととした。トレンチは2m×5mの約10㎡を基本単位とし、合計7地点において調査を実施した。なお、表土剥ぎや埋め戻しも含めて、調査は全て作業員による手作業で実施した。

調査期間は平成23～25年度の3か年にまたがり、2～3地点ずつ調査を行った。なお調査次数は年度で区切るが、全体を一連の「轟貝塚周辺発掘調査」と位置付け、トレンチ番号のみ通し番号とした。平成23年度の第9次調査は、貝塚中心部からみて北西方向の2地点(第1・第2トレンチ)、24年度の第10次調査は貝塚の北側1地点(第3トレンチ)及び、北西側2地点(第4・第5トレンチ)の計3地点、25年度の第11次調査は貝塚の西側、湧水地「轟水源」付近の2地点(第6・第7トレンチ)で調査を行った(図2)。

第2節 調査の成果

計7地点における調査の結果、およそ縄文時代とみられる遺構や遺物包含層が確認されたのは1Tのみである。1Tでは縄文時代後期を主体とする遺物包含層、土坑状に部分的に検出された貝層、複数のピットなどが検出された。ここは昭和41(1966)年の第6次調査で後期の貝層や人骨が出土したEトレンチに近く、当時の調査成果とも矛盾しない。一方で轟式土器や阿高式土器など、前期・中期の痕跡はほとんど検出されなかった。検出されたピット群が住居などに伴うものかは不明である。

その他、間接的ながら縄文時代の痕跡とみられるのが3Tで検出された貝層である。激しい湧水と調査区中央の攪乱により十分な検討ができなかったが、現地表から約1.7mの深さでハイガイを主体とする貝層が確認された。縄文時代のプライマリーな貝層かどうかは不明である。

貝塚中心部から北西方向に位置する2・4・5Tでは、縄文時代の遺物が若干は出土するものの、明確な遺構はおろか遺物包含層すら存在しなかった。後世の削平による可能性もあるが、一方で弥生・古墳時代や中世の遺物は多数出土するため、元々縄文時代の遺構・遺物は少ないと考える。

全7地点のうち、貝塚中心部から最も離れ、現在は環境省選定「日本名水百選」のひとつとして知られる「轟水源」の近くに設定したのが6T・7Tである。轟水源の湧水が縄文時代にまで遡るとする根拠は無いが、少なくとも付近に同様の湧水があったとすれば、その近くに集落が営まれた可能性は高いとみて調査を行った。しかし結果として、6Tは近世・近代、7Tは古墳時代の遺物を主体とし、縄文時代の生活を示す痕跡はみられなかった。

以上により、轟貝塚の北～北西方向の台地上において、貝塚縁辺部に縄文時代後期の痕跡が残る他は、縄文時代の痕跡は乏しいことが明らかになった。しかも貝塚から離れる程にそうした痕跡は減少する様子が見て取れるため、縄文時代後期を除けば、貝塚北西部の台地上は居住域としては推定し難いと言える。

第3章 貝塚中心部の発掘調査

第1節 調査の目的と方法

轟貝塚は、古くから度重なる調査が行われ、轟式土器の標式遺跡であることもあって非常に著名な遺跡である。しかし、近代考古学の発展と共に行われてきたそれらの調査は、人骨の検出や貝層の調査が主体であり、現代的な視点で貝層を含めた遺跡全体—すなわち人が生活した集落全体やその暮らしの遷り変わりなど—について検討し得るような成果には乏しかった。特に轟貝塚の代名詞とも言える、轟式土器を伴う縄文時代前期の状況については、過去に実施された調査ごとに層位の理解や所見に若干の相違が認められ、貝層の形成が前期に遡るかどうかさえ定かではない状況である。また、過去の調査で多数発見された人骨についても、埋葬土壌の検出面ではなく人骨そのものの出土位置で記録されているため、それぞれの層位（＝時期）に属するものが不明瞭という問題がある。

こうした状況から、過去の調査成果を正しく評価し、現状での遺跡の理解を明確にするため、過去に多くの発掘調査が行われてきた貝塚中心部の層序を今一度整理し直す必要がある。以上の目的で行ったのが、平成26～28年度の貝塚中心部における発掘調査である。

調査はあくまで遺跡の保存・活用のための基礎資料収集が目的であり、発掘調査といえども遺跡の破壊は最小限に止める必要がある。また、過去の調査で記録された層序を再確認するには、直接同じ場所の土層を確認するのが最も早く、効果的である。そうした考えにより、平成26年度はまず過去の調査区を検出し、埋土を再掘削した上で層序の検討を行う再発掘調査として実施した。その上で、調査区の拡張や一部新たな調査区を設けるなどして、各層の出土遺物と時期の検討を行ったのが平成27～28年度の調査である。

再発掘調査の対象としたのは、多くの遺物や人骨が出土した京都大学による第2次調査（1919年）、松本雅明による轟A～D式の型式分類の基準となった熊本大学を中心とした第5次調査（1958年）、多くの遺物と共に層位に関する最も詳細な記録が残る慶応大学を中心とした第6次調査（1966年）の3調査である。調査地点は計8か所で、1T・2Tは6次調査、3～6Tは2次調査、7Tは5次調査の再発掘を目的に設定した（図3）。また、各層に含まれる遺物を正確に把握するには一定量の新規掘削も必要とみて、最後に再発掘ではない8Tの調査を実施した。

第2節 調査の成果

（1）基本層序

調査の結果、全体の土層・貝層を以下のとおりⅠ～Ⅵ層に分層した（写真1及び第4章総括図4参照）。

表土であるⅠ層は畑に伴う耕作土である。下部の貝層を攪乱しているため多量の貝殻を含み、雨などにより土が洗い流されると一面が真っ白になる程である。その下のⅡ層は、ほとんど表土と変わらないが若干しまりが良い混貝土層である。遺物は縄文時代から近代まで多岐にわたる。ここまでの近現代の攪乱層である。

Ⅲ層は貝層で、いわゆる純貝層と呼べるものから混土貝層と呼ぶべき土混じりのものまで、場所によりやや濃淡がある。主体を成す貝の種類により大きく2層に分けられ、上部のⅢa層はカキ殻を主体とし、阿高式など縄文時代中期の遺物が含まれる。昭和41（1966）年の第6次調査で「純貝層」と表記されたものに対応する。下部のⅢb層はハイガイやハマグリを主体とし、A～D式の別なく広義の「轟式土器」を含む。この貝層については、過去の調査記録の中に明確に対応するものが見出せないが、慶応大学による調査を指揮した江坂輝彌氏は前期の貝層が存在することを示唆しており、それがこのⅢb層を指していた可能性がある。

Ⅳ層は褐色土層である。これも上下2層に分けられ、上部のⅣa層は多量の貝殻や獣骨・魚骨を含む

他、轟B式土器をはじめとした多くの遺物が出土している。後述する貝殻廃棄土坑や集石の存在など、縄文時代前期とみられる生活痕跡を多く含む土層であり、貝層形成前にも同所で人々の暮らしがあったことをよく示している。下部のIVb層は、IVa層に比べやや黒色がかった暗褐色土である。遺物や貝殻・獣骨等の混入はIVa層に比べ大幅に少ない。数は少ないながら、轟式土器の他に塞ノ神式土器、押型文土器などを含み、時期は縄文時代前期か、早期末葉に遡る可能性がある。なお、土層のテフラ分析を行った結果、IVb層の上半部からIVa層にかけて、鬼界アカホヤ火山灰に由来する火山ガラスが含まれることがわかっている。

V層は黒色土層である。IVb層と同様、轟式土器や一部塞ノ神式土器とみられる遺物を含むが、詳細な時期については遺物の整理を待って、いずれ本報告にて言及したい。IVb層が早期末に遡る可能性があることから、ここではこのV層も早期に遡る可能性があることだけ述べておきたい。ごく微量だが貝殻や獣骨も出土しており、小規模ながら周辺に人の生活が営まれ始めていたことが推察される。

VI層は黒色砂質土と粘質土、それに地山である黄褐色ローム土とが混ざる粘質土である。土質から何らかの水成堆積である可能性が考えられ、地山の土が部分的に混ざる点からは、地山を削るような激しい流れなども想定できる。遺物は土器などがごく微量出土しているが、時期など詳細は不明である。その下部が、固くしまった黄褐色ローム様の地山である。

(2) 検出遺構

過去の調査区の再掘削後に行った調査区床面の掘り下げや外側への拡張、また新たに設けた調査区(8T)の調査などにより、縄文時代早～前期とみられる遺構を複数確認した。

まず最も目を引くのが、3T・5T・8TにおいてIVa層の下部(IVb層上面付近)で検出した集石遺構である。検出した礫の大半が被熱しており、調理などに使用された可能性が高い。ただし明確に土坑を伴うものは無く、検出状況も広範囲に散乱していて単位が不明瞭である。こうした点から、これらは使用時の状況そのままではなく、使用後に土坑からかき出されるなどした二次的な状況が、複数重なり合って検出されていると考えられる。集石にはいわゆるミミズ腫れ状の隆帯を持つ典型的な轟B式土器が伴っており、縄文時代前期の遺構と考えられる。また、4Tでは同じくIVa層下部からIVb層に掘り込んだ、焼土と焼けた貝殻などを覆土とする土坑も検出しており、炉穴と推定される。これらの発見により、貝層の下に縄文時代前期の生活面が残されていることが明らかとなった。

その他の遺構として、集石や焼土坑よりやや新しいIVa層の中ほどから掘り込まれた土坑がある。これらはハイガイを中心とした多量の貝殻を覆土としており、貝殻を廃棄するための土坑と推察される。これを8Tで2基確認したが、広く面的に調査をすれば他にも検出される可能性がある。前期とみられる貝層(Ⅲb層)の下に位置することから、これらはまとまった貝層が形成される前段階の、スポット的に形成された小規模貝塚と位置付けられ、轟貝塚における貝層形成の最初期の姿を示すとみられる。

3T及び8Tにおける人骨(土壙墓)の検出は、過去の調査の再評価を目的とする今次調査で特に注目すべきものである。合計5体確認した人骨のうち4体(1～4号人骨)は、IVa層最下部に形成された集石の下から検出され、IVb層に属することから縄文時代早期(末葉)に遡る可能性がある。いずれも仰臥屈葬の姿勢をとることから埋葬人骨であるのは間違いないが、土壙墓のプランが検出できなかった。ひとつの可能性として、明確な土壙を持たない盛土による埋葬形態が想定される。残る1体(5号人骨)はやや不明瞭ながら土壙を伴う。それはIVa層に掘り込まれ、上部をⅢb層が覆うことから、Ⅲb層の貝層が形成される前段階に位置づけられ、時期は縄文時代前期と考えられる。また、人骨の直下に前述のスポット貝塚が存在する点からは、スポット貝塚が形成された時期とⅢb層が形成された時期の間に若干の開きがあり、その間に埋葬が行われたことがうかがえる。

大正8(1919)年の第2次調査を筆頭に、過去の調査で多くの人骨が発見されているが、残る記録はどれも人骨そのものの検出位置であり、土壙の有無や、それがどの層から掘り込まれるのかが不明である。よって、それぞれがどの時期に属する人骨なのかが不明という問題がある。今回の発見により、埋葬時期が縄文時代早期と前期の2時期に分かれる可能性があることが明らかになった点は重要である。

(3) 遺跡の変遷

以上の調査成果により、これまで体系的に描かれることの無かった轟貝塚における土地利用の変遷がおぼろげながら把握できた。貝塚が存在する台地の先端部分に限ったものではあるが、縄文時代における遺跡の変遷は概ね以下のとおり7つの段階に分けて捉えられる。

1. 周辺における土地利用の開始（Ⅴ層 縄文時代早期?）

小規模だが、遺跡周辺において貝（魚介類）や獣など、山海の食料資源を人が利用し始める。

2. 台地の先端が墓域として利用される（Ⅳb層 縄文時代早期末～前期）

3. 盛んに煮炊きを行うなど、生活の場となる（Ⅳa層 縄文時代前期）

被熱した集石や焼土坑の存在、包含層に含まれる多量の実物残滓（貝殻・獣骨・魚骨など）による。

轟貝塚におけるアカホヤ降灰のピークと重なるが、明確な火山灰層を形成する程ではなく、集落の存続には大きな影響は無かったと考えられる。

4. 土坑に貝殻を廃棄した、スポット状の貝塚が形成される（Ⅳa層 縄文時代前期）

5. 墓域が形成される（Ⅳa層 縄文時代前期）

6. ハイガイやハマグリを主体とする貝層が形成される（Ⅲb層 縄文時代前期）

Ⅲb層の検出位置や厚さから、貝層は台地先端部のほぼ中央に塚状に形成されたとみられる。

7. カキを主体とする貝層が形成される（Ⅲa層 縄文時代中期～後期初頭）

Ⅲa層の検出位置や厚さを総合すると、貝層は台地の西側斜面に広く形成されたとみられる。

8. 貝層（廃棄場所）を含む生活の場が北側の微高地に移動する（縄文時代後期）

昭和41（1966）年の慶応大学を中心とした調査の成果による。

この他、表土や攪乱層から出土した多くの遺物により、弥生時代・古墳時代・中世などにも盛んな土地利用があったことがうかがえる。



写真1 標準土層断面（4 T 南東壁）



写真2 集石検出状況（8 T）



写真3 集石に伴う遺物



写真4 5号人骨検出状況（8T）

第4章 総括

古くから世に知られ、度重なる発掘調査が行われてきた轟貝塚は、轟式土器の標式遺跡であることと併せ学史上非常に重要な遺跡である。しかし一方で、遺跡の範囲や時期ごとの変遷など、遺跡そのものの基礎情報が長い間未解明であった。特に、轟貝塚の代名詞とも言える轟式土器を伴う縄文時代前期については、貝層を含めて明確な遺構の発見がこれまでに無く、実態が不明であった。そうした点を課題とし、遺跡の全体構造や変遷を解明することを目的に実施したのが前章までで述べた平成23～28年度の発掘調査である。

貝塚に伴って付近に存在すると考えられる居住域の確認を目的に行った平成23～25年度の貝塚周辺部の調査では、貝塚の想定堆積範囲の北西側縁辺部でわずかに縄文時代後期の痕跡を確認した他は、調査したほとんどの地点で縄文時代の遺構はおろか、遺物包含層すら確認できなかった。後世に削平された可能性も考えられるが、一方で弥生・古墳時代や中世遺物が多く出土している点を考えれば、元々縄文時代の遺構・遺物の密度が低いとみるのが自然である。このことは、轟式土器が使用された縄文時代前期や大規模に貝層が形成された中期において、貝塚北西側の微高地では顕著な土地利用が無かった可能性を示唆している。

一方、過去に多くの調査が行われてきた貝塚中心部について、層序等の再確認のため実施したのが平成26～28年度の調査である。平成26年度は主に過去の調査地点の再発掘と土層の再確認を中心とした調査、27～28年度には確認した層序を基に、調査区の拡張や一部において新規掘削を行い、改めて層ごとの遺物抽出と遺構検出に努めた。調査の結果、全体の土層・貝層を図4のように理解した。まず特筆すべきは、貝層の細分化により過去の調査で把握されていなかった前期の貝層を確認したことである。貝層は大きく上下2層に分けられ、上層（Ⅲa層）はカキを主体とした純貝層で、昭和41（1966）年の慶応大学による調査（第6次調査）で阿高式土器を含む中期の貝層とされたものに対応する。対する下層

(Ⅲb層)はハイガイやハマグリを主体とし、貝殻条痕を持つ広義の縄式土器を含むことから縄文時代前期に遡ると考えられる。第6次調査を指揮した江坂輝彌氏が存在を指摘するも、当時の図面上で確認できない「縄式後半の時期のハイガイの多い薄い貝層」(江坂1971)とは、このⅢb層にあたる可能性が高い。また、更に下層の褐色土(Ⅳa層)中では多量のハイガイを覆土とする土坑が確認され、こうしたスポット状の貝の廃棄が、轟貝塚における貝殻多量廃棄の初期の姿と考えられる。

第二に、貝層の下で発見された縄文時代前期とみられる生活痕跡が注目される。前期の生活痕跡は主に貝層下の褐色土層(Ⅳa層)中にあり、貝殻以外にも多量の獣骨・魚骨などの食物残渣が含まれる。Ⅳa層最下部では被熱の激しい集石や焼土坑が検出され、轟B式土器を伴っていた。明確に縄式土器を伴う前期の遺構は、長い調査史を持つ轟貝塚でも初の発見である。

第三は、埋葬人骨の検出である。上記の集石の下(Ⅳb層)から4体、前期の貝層(Ⅲb層)の下から掘り込まれた土壌中に1体と、計5体が検出された。いずれも仰臥屈葬の埋葬状態を保ち、改葬や攪乱を受けていない。Ⅳb層中の4体については土壌墓のプランが確認できず、顕著な土壌を伴わない盛土のみによる埋葬も想定される。出土層位により、人骨はそれぞれ縄文時代早期末と前期の2時期に分けられる。京都大学をはじめ過去の調査でも多数の人骨が出土しているが、帰属する層位が明確なものは今回の発見が初めてである。また、早・前期の人骨がまとまって検出されること自体が稀であり、人類学的にも貴重な資料と言える。

以上の調査成果を総合すると、第3章や図4に示したように土地利用の変遷を計8期に分けて捉えることができる。それはあくまでも調査を行った台地先端部の状況だが、遺跡全体の変遷を把握する上で大きな前進と言える。今後、遺跡の更なる理解のためには、未だ調査の及んでいない貝塚南東側低地部の状況や、谷を挟んで向かい合う西岡台貝塚との関係を確認することが検討課題となる。

【引用・参考文献】

宇土市教育委員会1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集

宇土市教育委員会2005『轟貝塚・馬門石石切場跡—宇土市内遺跡範囲確認調査概報—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第27集

宇土市教育委員会2006「轟貝塚」『轟貝塚 馬門石石切場跡—宇土市内遺跡範囲確認調査報告書—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第28集

宇土市教育委員会2008『轟貝塚—慶應義塾大学資料再整理報告—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集

江坂輝彌1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第19号 日本考古学協会

清野謙次1920「肥後国宇土郡轟村宮庄貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第5冊

濱田耕作・榊原政職1920「肥後国宇土郡轟村宮庄貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第5冊

松本雅明・富樫卯三郎1961「縄式土器の編年—熊本県宇土市轟貝塚調査報告—」『考古学雑誌』第47巻第3号日本考古学会

松本雅明1967「肥後考古学会の成立前後」『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会

5次 熊大調査 (1958)

6次 慶大調査 (1966)

2次 京大調査 (1919)

12~13次 宇土市教育委員会調査 (2014~16)

層位名 特徴 出土遺物(土器型式) 時期推定

「耕作土」	「表土」	I層	表土・耕作土	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・埴輪片・陶磁器類ほか	現代
「純貝層」	「混貝土層」	II層	混貝土層		中世~近現代
「混土貝層」	「純貝層」	IIIa層	貝層 (カキ主体)	阿高式, 並木式	縄文時代中期
		IIIb層	貝層 (ハイガイ・ハマグリ主体)	溝式 (A~D式含む)	縄文時代前期
		IVa-1層	褐色土 (上層) 貝殻等多量含む	溝式	縄文時代前期
「貝層」	「褐色土層」	IVa-2層	褐色土 (下層) 貝殻・アカホヤ含む	溝式 (B式が主体か)	縄文時代前期
		IVb層	暗褐色土 アカホヤ微量・軽石含む	溝式, 塞ノ神式, 押型文	縄文時代早期末~前期
	「純黒土層」	V層	黒色土	溝式, 塞ノ神式	縄文時代早期?
		VI層	黒褐色粘質土 砂質土・粘質土・地山のロームが混じる		縄文時代早期以前
		地山	黄褐色ローム様		

土地利用の変遷

- 1期 土地利用の開始 (V層 縄文時代早期?)
小規模ではあるが、遺跡周辺において貝 (魚介類) や獣などの食料資源を利用し始める。
- 2期 台地先端が墓域として利用される (IV b層 縄文時代早期末~前期)
3 T出土 1~4号人骨
- 3期 盛んに煮炊きを行うなど、生活の場となる (IV a層 縄文時代前期)
被熱した集石や焼土坑の存在、包含層に含まれる多量の食物残渣 (貝殻・獣骨・魚骨など) の存在による。
- 4期 土坑に貝殻を廃棄した、スポット状の貝塚が形成される (IV a層 縄文時代前期)
- 5期 台地先端に再び墓域が形成される (IV a層 縄文時代前期)
- 6期 ハイガイやハマグリを主体とする貝層が形成される (III b層 縄文時代前期)
III b層の検出位置や厚さから、貝層は台地先端部のほぼ中央に塚状に形成されたとみられる。
- 7期 カキを主体とする貝層が形成される (III a層 縄文時代中期~後期初頭)
III a層の検出位置や厚さから、貝層は台地の西側斜面に広く形成されたとみられる。
- 8期 廃棄場所としての貝層を含め、生活の場が北側の微高地に移動する (6次調査E Tレンチ, 9次調査1 T 縄文時代後期)

*9期以降 弥生~古墳時代に付近に集落形成, 古墳築造?, 中世の館跡, 近世初期には現状の畑としての利用開始。

図4 轟貝塚基本層序及び土地利用の変遷

報告書抄録

ふりがな	とどろきかいづか						
書名	轟貝塚Ⅱ						
副書名	平成23～28年度（第9～13次）発掘調査概要報告書						
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ号	第36集						
編著者名	芥川博士						
編集機関	宇土市教育委員会						
所在地	〒869-0433 熊本県宇土市新小路町95						
発行年月日	2017年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査回数	調査面積
		市町村	遺跡				
轟貝塚	熊本県宇土市 宮庄町字須崎ほか	43211		32° 40' 45"	130° 38' 27"	9～13次	245.7㎡
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		
轟貝塚	貝塚	縄文時代 弥生時代 古墳時代・中世		集石遺構 土壙墓	縄文土器・石器・人骨・獣骨・魚骨 弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器		
特記事項							
<p>縄文時代前期「轟式土器」の標式遺跡として古くから知られながら、遺跡の全体構造や変遷など多くの検討課題が残されていた轟貝塚の発掘調査を実施。調査の結果、縄文時代中期とみられた貝層の下で、前期の貝層や集石遺構などの生活痕跡、一部早期に遡る可能性のある埋葬人骨などを確認した。</p>							

轟貝塚Ⅱ

— 平成23～28年度（第9～13次）発掘調査概要報告書 —
宇土市埋蔵文化財調査報告書 第36集

発行年月日 2017年3月31日
編集・発行 熊本県宇土市教育委員会
〒869-0433 熊本県宇土市新小路町95
TEL 0964-22-6500（代） FAX 0964-58-1005

印刷 シモダ印刷株式会社
〒869-0562 熊本県宇城市不知火町長崎240-1
TEL 0964-32-3131 FAX 0964-34-3111